

# 「美しい女」と「満開の桜の森」の真相—「桜の森の満開の下」をめぐる

A Significance of “A Beautiful Woman” and “The Woods Beneath the Cherry Blossoms in Full Bloom”

On “In the Woods Beneath the Cherry Blossoms in Full Bloom” by Sakaguchi Ango<sup>1</sup>

応 傑

## 論文要旨

本稿は「無頼派」作家坂口安吾の代表作である「桜の森の満開の下」の考察を通して、安吾文学の主題のひとつ——本質的な意味において、人間は救いがないこと——を指摘したい。

ただ、人間の本質的な悲哀を指摘することこそが安吾文学の価値だと思うことは明らかに誤解だ。安吾文学の価値は、人間の本質的な悲哀を認識した後の悟りにある。人間の悲哀を認識してこそ、幻的な道徳、価値を、「フェルス」の態度で肯定し、否定することができ、真の意味で人間に愛を持てる。そういう点で安吾文学は、既存道徳に大きな衝撃を与えると同時に、慈悲さも感じさせるものだといえよう。

## 一 はじめに

鈴鹿峠で、旅人の財産を奪い、「後悔ということを知らない」<sup>2</sup>一人の山賊が心配事を知らずに暮らしをしていた。「目に見える山という山、木という木、谷という谷、その谷からわく雲まで、みんな俺のものなんだぜ」と自分の生活に満足するが、しかし「美しい女」の到来によって、すべてが変わる。山賊は、「美しい女」の機嫌をとるために、6人の妻、妾を殺し、いちばん醜い「ビッコ」の女だけを残した。山賊は、「美しい女」にしたがって、山を離れ、都市へ行くが、自分の魂がこの「美しい女」に吸い取られたと感じるようになり、山へ戻ろうと決心した。「桜の森の満開の下」を通ったとき、「美しい女」は「全身が紫色の顔の大きな老婆」となり、口が「耳までさげ、ちぢくれた髪の毛は緑」の鬼になった。あまりにも驚いた山賊は、鬼を絞め殺し

た。「この日まで、泣いたことがなかった」山賊は、「ワツとなきふし」た。

以上が、「桜の森の満開の下」(『肉体』第一巻第一号、1947年)の粗筋だ。この異色な小説の坂口安吾文学ないし日本近現代文学における位置づけは、いくら強調しても度を過ぎることは多分ないように思われる。この小説の英訳者であるロジャー・パルバースが自分の公式サイトで、「桜の森の満開の下」を21世紀に残る日本小説の2番目に選んでいる<sup>3</sup>。

この小説に対する評論、解説が多いのも不思議なことではない。ただそれらの評論、解説を見渡すと、共通のキーワード「虚無、悲哀」が潜んでいることも否定できない。これは日本における「桜の森の満開の下」の研究の肇となった福田恒存が「人間存在そのものの本質につきまとう悲哀——それを追求しよう」と指摘したからかもしれない。和田博文が言うように、「福田恒存は、『人間存在そのものの本質につきまとう悲哀——それを追

(平成18年5月31日受付／平成18年7月20日受理)

求しようとして』(中略) 以後の『桜の森の満開の下』論は、福田の解説の延長線に展開されていくことになる<sup>4</sup>。悲哀が日本における「桜の森の満開の下」研究の主流となっている。

中国における数少ない研究を見ても、そのキーワードは「虚無、悲哀」に集中しているように見える。張哲俊が言うように、「影原型が破裂し、意識的自我が失われた。すべてが虚無である。この避けることのできない悲劇が、人間が無限なる強烈な欲望の前において、自己解放のできないことを示している。人間は、完全なる孤独、救いのない暗黒におかれ、影原型の指揮にしたがうしかない<sup>5</sup>」。

このような解読は無論、小説の末尾から影響を受けているのだろう。小説の末尾に、坂口安吾は、このように書いている。

ほど経て彼はた々一つのなまあた々かな何物かを感じました。そしてそれが彼自身の胸の悲しみであることに気がつきました。花と虚空の冴えた冷たさにつつまれて、(中略)あとに花びらと、冷たい虚空がはりつめていくばかりでした。(傍点筆者)

ここの「悲しみ」、「虚空」などが福田恒存をはじめとした評論家に影響を与えたことは否定できない。しかし、天皇制に「万歳」と三呼せず、あれだけ力強く「嘘付け！嘘付け！嘘付け！」(「続墮落論」)と叫び、「肝臓先生」のような病人のために奔走する医者像を作り出した作家である坂口を「虚無、悲哀」でまとめることはとてもできない。坂口安吾の小説、エッセイを通読しても、反抗、悟り、力強さをより多く体得するのではないか。「虚無、悲哀」の影が潜んでいるとしても、それ

は決して坂口安吾の本意ではないと思われる。本小論では、「美しい女」と「満開の桜の森」の真相を中心に、「桜の森の満開の下」を解読しようとするものである。

## 二 「美しい女」は何を意味するか

山賊は、「むごたらしい男で、街道へでて情け容赦なく着物をはぎ人の命も断ちました」が、しかしこれはあくまでも彼の生活上の必要で、そこに何らかの目的、追求があるものではない。あるいは今風の言葉で言えば、山賊の行動に、何も意義がない。小説の中にもあるように、「山賊は始めは男を殺す気はなかったので、身ぐるみ脱がせて、いつもするやうにとつとと失せると蹴飛ばしてやるつもりでした」(傍点筆者)。ここの「いつもするやうに」からもわかるように、山賊は普段は人を殺さなかったわけだ。彼が必要とするものは、暖を取るための衣服であり、空腹を飽かすための食物だった。人の命を断つのも、身を守る必要からだとして、この「いつもするやうに」から推測できるのだろう。

山賊は常に愉快だった。いつも「これだけの山といふ山みんな俺のものなんだぜ。(中略)お前の目に見える山といふ山、木といふ木、谷といふ谷、その谷からわく雲まで。みんなおれのものなんだぜ。」と満足している。彼には、物を占有する欲望などは何も無く、自然こそが自分の所有物だった。

山賊の性欲もまた並大抵のものではなかった。「始めは一人だった女房がもう七人になり、八人目の女房を又街道から女の亭主の着物と一緒にさらってきました」。ただここで気をつけなくてはならないのは、この性欲もあ

くまで動物的衝動で、女房が「美しい女」でなければいけないとか、仲間に自慢したりするためとかではなかった。自分の性欲を満足させてくれば、「ビッコ」<sup>6</sup>でもかまわなかったのだ。

山賊は、まったく社会的属性が無く、あくまで原始的で、野蛮的で、文明の洗礼を受けることがなかった。彼のすべての行動は、身体的衝動と情熱などの「生命への意志」(ニーチェ)によるものではなかつただろうか。即ち山賊は、まさにニーチェが言った、一個の「動物的」身体だ。彼の行動基準は、自分の「身体」の必要だ。坂口安吾は、この小説で一人の原始的意味での人間像を作り出しているのではなからうか。

ところが、一人の「美しい女」の到来によってすべてが変わった。あまりにも「美しい女」に魅了されて、山賊は、言われるままに行動するようになる。

山賊は女の亭主を殺すときから、どうも変だと思つておりました。いつもと勝手が違ふのです。(中略)

女が美しすぎたので、ふと、男を切り捨てておりました。彼自身に思ひがけない出来事であった。

もともと身体の衝動と必要からの殺人が、「女が美しすぎたので、ふと、男を切り捨てておりました」。この「美しい女」のため、山賊は殺したくなかった男性を殺し、さらに「美しい女」の命令で、6人の妻を殺した。彼は、「美しい女」を背負って山々を越え、「美しい女」が山が嫌いとの一言で、鈴鹿峠を離れて、都会へ行き、毎晩人の首狩りをして、「美

しい女」を楽しませようとした。彼の行動は、もう生活と身体が必要ではなく「美しい女」のためへと変化する。「美しい女」の命令は、山賊の行動に意義を持たせ、行動の理由付けとなった。

山賊は、結局生命への意志を失い、自分の動物的身体を喪失したのだ。

坂口安吾は、読者に「身体喪失」の結果を知らせたが、喪失の原因については、読者が仔細に探さなければわからない。それを理解するには、まず「美しい女」の意味を解明しなくてはならない。

では、「美しい女」とは何を意味するのか。まず「美しい女」は都会的だ。それは、その女が「街道から女の亭主の着物と一緒にさらつてき」た八人目の女房だという一文でわかる。「美しい女」は山賊がすむ未開地と対立する都市文明の象徴で、彼女にとっては、都会から未開地へ「越境」したことになる。「美しい女」は、都会の視点から山賊を軽蔑し、それによって、山賊は「女が『都』といふたびに彼の心は怯えおののきました」ようになった。都会には「牙のある人間」もなく、「刀が折れてしまふやうな皮の堅い人間」もない。あるのは、「弓をもつたサムライ」、「鎧をきたサムライ」だけだ。「美しい女」がどうしても都会へ帰らなければならないのは、都会が自分の欲望を満足してくれるからだ。言い換えれば、文明を象徴する都会が所有するものは、恐怖から逃れる欲望だ。

したがって、「美しい女」は人工的で、その美しさは人工的に作り出されたものだ。

女は櫛だの笄だの簪だの紅だのを大事にしました。彼が泥の手や山の獣の血にぬれた手

でかすかに着物にふれただけでも女は彼を叱りました。まるで着物が女のいのちであるやうに、そしてそれをまもることが自分のつとめであるやうに、身の廻りを清潔にさせ、家の手入れを命じます。その着物は一枚の小袖と細紐だけでは事足りず、何枚かの着物といくつもの紐と、そしてその紐は妙な形にむすばれ不必要に垂れ流されて、色々の飾り物をつけたすことによつて一つの姿が完成されていくのでした。(傍点筆者)

山に暮らした山賊はこの人工的美しさをとでも理解できないが、その美しさには傾倒した。「男は目をみはりました。そして嘆声もりました。(中略)それを彼は彼らしく一つの妙なる魔術として納得させられたのでした」。

「美しい女」の何よりも大きな特徴は、言説に対するコントロールではなかろうか。彼女は、山賊が首狩りをしてきた首にそれぞれの役を振り分け、物語を造る。これは、「美しい女」が言説に対するコントロール権を所有していることを象徴している。彼女の欲望は他人の命を代価とする。

問題はあれだけむごたらしい山賊がどうして「美しい女」を見るや否や、跪拝し、言われるままになったのだろうかということである。

ニーチェがかつてこのように言っている。

創造者としての人間の欲求は、かれが手がける世界をすでに仮構しており、それを先取している。(中略)私たちがこれこれであるということなどに対して責任ある誰か(神、自然)を私たちが空想するやいなや、それゆえ、意図としての私たちの生存を、私たちの

幸福や悲惨をその誰かにおしつけるやいなや、私たちは生成の無垢を台無しにする」(傍点原文)。<sup>7</sup>

ニーチェのこの話に、山賊が「美しい女」に跪拝する答えが秘められている。「美しい女」こそまさにニーチェの言う「仮構」であり、山賊本人が「仮構」したものではなかろうか。「こんな男でも桜の森の花の下へくるとやつぱり怖ろしくなつて気が変わりました」の一節からもわかるように、山賊にとって唯一の恐怖は桜の森の下だ。満開の桜の森については後述に譲るが、十数年たつても、「今年も亦、来年になつたら考えてやろうと思つて、又、年が暮れてしまひました」という山賊にとっては、桜の森が最大の心配事だったに違いない。誰か、誰か教えてくれようと期待しているうちに、「美しい女」が出現したのだ。言ってみれば、女の美しさは、山賊自身が期待し、「仮構」したものではなかろうか。この「仮構」こそ、山賊に「生成の無垢」——身体的自由をなくさせたのではなかろうか。ここに坂口安吾の鋭さがある。即ち小説では、山賊も「美しい女」もひとつの記号と化し、山賊が原始的人間で、「美しい女」が人類自身が「仮構」した「責任ある誰か」になっているのだ。山賊は、空想して、自分の生存、自分の幸福、悲惨を「美しい女」におしつけたのだ。「美しい女」が言説をコントロールできたのは、山賊が自らそういう権力を与えたにすぎない。坂口安吾が常に批判の矛先を人類が仮構した価値、意義に向けているのをここからも、その兆しを見て取ることができる。もちろん、そのような「仮構」価値には、「忠臣二君に仕え」ない天皇制と

「節婦二夫見え」ない節婦観が含まれることは言うまでもない。それは、「墮落論」、「日本文化私観」を生み出した理由でもあろう。

### 三 「満開の桜」は何を意味するか

言われるままに行動する山賊は、その「身体」を完全に失うのではない。身体は、刻々と復権を企んでいた。

「美しい女」を背負っているとき、山賊の身体は常に疲れを感じ、休もうとする。彼は、「身体が節々からバラバラに分かれてしまったように疲れてゐました。そしてわが家の前へ辿りついたときには目もくらみ耳も嘎れ声のひときれをふりしぼる力もありません」。そして、身体は常に「美しい女」を疑い、満開の桜の森と似ていると思い、自分の魂が女に吸い取られているように思う。彼は、満開の桜の森へ行き、疑惑を消そうとした。

山賊は都会を恐れ、嫌うようになった。「男は都を嫌ひました」。

山賊は「美しい女」の欲望がきりのない空へ飛ぶ小鳥だと思った。唯一の方法は、それを射落とし、山へ帰り、桜の森の下へ帰ることだった。

けれども彼女の欲望はキリがないので、そのことに退屈してゐたのでした。女の欲望は、いはば常にキリもなく空を直線に飛びつづけてゐる鳥のやうなものでした。(中略)

彼は気がつくとき、空が落ちてくることを考えてゐました。空が落ちてきます。彼は首をしめつけられるやうに苦しんでゐました。それは女を殺すことでした。

山へ帰らう。山へ帰るのだ。(傍点筆者)

この「きりのない欲望」を射落とす構図は、「墮落論」(『文学季刊』第二号1946年)の「生きよ、落ちよ」構図とほぼ一致しているといえる。即ち、天皇制、武士道から逃れるためには、そのような既成道徳から「落ちる」しかないのと同じく、「美しい女」の「きりのない欲望」から逃れるためには、それを「射落とす」しかないのだ。ここでは、「射落とす」と「落ちる」ことは等価だ。さらに「真珠」(『文芸』1942年)と比べるとよい。「真珠」の9名の勇士は、飛行機に乗って、「きりのない空」を飛んだ怨霊ではなからうか。「きりのない空」に吸い取られるか、射落とすかの二者択一だ。山賊は桜の森の満開の下へ戻る決意をする。桜の森の満開の下へもどれば、「美しい女」の真相がわかる。それでは、「満開の桜の森」はまた何を意味するのか。

小説の最後で、坂口安吾は、このように書いている。

彼は始めて四方を見廻した。頭上に花がありました。その下にはひつそりと無限の虚空がみちてゐました。(傍点筆者)

即ち、坂口はここで桜の森を「虚空」と「孤独」の象徴とみなしている。ではなぜ桜が「虚空」と「孤独」の象徴になりうるのか。桜と日本伝統文化との関連から究明してみたい。

いうまでもなく、日本文化において、桜の花は、死と切っても切れない関係を持っている。小説の冒頭では、母親が「狂い死して花びらに埋まってしまう」能劇があるとするように、昔から「桜の森の満開の下」は恐ろし

さ極まる場所だ。さらに古にさかのぼれば、西行の有名な「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」がある。また近代から見ても、柳田国男が次のように書いている。

墓地や行旅死亡者を埋めた場所を標示すべく、特に枝垂れた桜の若木を持つてきて栽ゑたといふことも、単に其土地が常用に供すべからざる一区画なることを人に知らしめる目的以外に、人間の魂魄も亦蒼空を通つて、祭られに来るものと信じて居た痕跡を想像し得られるので（後略）<sup>8</sup>。

即ち、桜の森とは墓地だ、と柳田国男の研究からわかる。現に、今の青山墓地が桜の名所で知られることは周知の通りだ。さらに、梶井基次郎が「桜の木の下には」の冒頭で、劈頭第一句に「桜の木の下には死体が埋まっている」と書いているのを言うにも及ばないのだろう。

日本文化において、桜と死との関係がどれだけ緊密かは、たぶん以上の引用からもわかるだろう。「桜の満開の森」の場所とは、都会から離れた僻地であり、山賊と都会人の双方桜に対する恐怖をもっていること、それはすなわち文明も未開も共有する死に対する先天的恐怖である。このような点から見ると、桜の森の満開の下には、多くのお墓と累々たる白骨が想像できよう。坂口安吾は明言を避けたが、彼のいう「満開の桜の森」は実はひとつの大きな墓地であることは疑いようもない。これこそ人々がそこを通るときにびくびくし、みんな気違いのように一目散に逃げ去る理由だ。簡単に言えば、死は、誰もが避け

ようとしながら、誰もが避けることのできない人類の根本的悲哀だ。死の前では、いくら美しいものでも、その鬼形を現さずにはできない。映画監督の篠田正浩が桜の森を天皇制とみなしているが<sup>9</sup>、筆者には主人公を狂わせた「美しい女」こそ天皇制の象徴であり、人類すべての仮構価値の象徴であるように思われる。死を前にしてこそ、これらの仮構価値は、「美しい女」のように、その鬼形を現出する。

桜の森の下で、山賊は「ワツとなきふし」、慟哭するが、この慟哭は、まさに福田恒存がいう「人間存在そのものの本質につきまとう悲哀」を確認した後の生命力の慟哭だ。見た目では悲哀と生命力は、一種の二律背反に見えるが、死への観照、凝視を通してこそ、山賊は真の意味で成熟し、真の意味で生命への意志を持ち、恐れることがなくなったのではなかろうか。

桜の森の満開の下の秘密は誰にも分かりません。あるひは「孤独」といふものであつたのかも知れません。なぜなら、おとこはもはや孤独を怖れる必要がなかつたのです。彼自らが孤独自体でありました。

「彼自らが孤独自体でありました」を認識してはじめて孤独を怖れる必要がなくなり、死を認識してはじめて本当の生を得られた山賊は、もう「美しい」何かを仮構せずもよいのだ。

坂口文学を解読するために不可欠な鍵である「文学のふるさと」(『現代文学』1941年)と結び付けて、さらに見てみよう。このエッセイの中で、坂口安吾は、童話「赤頭巾」、狂

言「鬼瓦」と「伊勢物語」の三つのストーリーから、人間のふるさとと文学のふるさとは徹底した「アモラル」、「救いがない」、「突き放す」状態にあることを指摘している。安吾は「文学のふるさと」のなかで次のように言っている。

それならば、生存の孤独とか、我々のふるさとというものは、このようにむごたらしく、救いのないものでありましょうか。私は、いかにも、そのように、むごたらしく、救いのないものだと思います。この暗黒の孤独には、どうしても救いがない。我々の現身は、道に迷えば、救いの家を予期して歩くことができる。けれども、この孤独は、いつも曠野を迷うだけで、救いの家を予期するすらもできない。そうして、最後にもごたらしいこと、救いがないということ、それだけが、唯一の救いなのであります。モラルがないということ自体がモラルであると同じように、救いがないということ自体が救いであります。

私は文学のふるさと、或いは人間のふるさとを、ここに見ます。（傍点筆者）

山賊が体得した「彼自らが孤独自体でありました」は、ここ「救いのないこと自体が救いで」とあるということと等価であることは間違いない。

この「ふるさと」について、日本の学者藤原耕作が「無頼という場所」<sup>10</sup>の中で次のように言っている。

「ふるさと」へと向かうことは、「生」への意思に逆行するという意味で、「死」にぎりぎりまで近づいていく行為だと考えられる

（中略）。「ふるさと」に近づくことが「死」に近づくことに重なっているということがよくわかる。（中略）この、〈ふるさと〉にかえりつくこと、「死か生かの分岐点（「悲願に就て」）にまで行きつくことは、常に安吾文学の焦点なる場面であり、一つの極点である。ちなみに、こうした〈ふるさと〉方向への運動を、安吾は〈墮落〉と呼んでいる。

即ち、坂口安吾は「桜の森の満開の下」でも、「文学のふるさと」を発見した。「満開の桜の森」は「文学のふるさと」と等価であることを発見したのだ。山賊が「満開の桜の森」の下で体得した「虚空、孤独」は、まさに「文学のふるさと」における「アモラル」、「救いがない」と「突き放す」ではなかるうか。山賊の「満開の桜の森」への回帰は文学のふるさとへの回帰であり、死への回帰でもある。安吾のほかの言葉で言い換えると、それは「墮落」であり、「射落とす」であり、「アモラル」、「救いがない」と「突き放す」であろう。

#### 四 死と破壊

坂口安吾は、「桜の森の満開の下」の秘密を発見し、それを指摘することにとどまらなかった。もし人生の本質は死であり、価値、道徳は幻だと指摘することにとどまるだけなら、坂口安吾文学は、悲哀で虚無でしかないといわれても仕方がない。しかし安吾文学の価値は、いかにして「文学のふるさと」へ回帰するかということにある。「文学のふるさと」へ回帰するためには、「美しい女」を絞め殺し、「美しい女」を破壊しなければなら

ない。破壊こそ「ふるさと」へ回帰でき、生への意志を取りもどすことができる。安吾が破壊を恐れず、戦争を愛すると公言するのもこのためであろう。「古代文化が全滅しても、生活は亡びず、生活自体が亡びない限り、我々の独自性は健康である」という安吾は、天皇制に「嘘付け！嘘付け！嘘付け！」と叫び、小説において、数多くの破壊を熱愛する主人公を世に送り出している<sup>1)</sup>。

安吾はかつて「桜の森の満開の下」を名高い『文芸春秋』へ投稿したが、まったく小説にならないと批判されて却下された。仕方なく、安吾は三流雑誌の『肉体』(1947)に投稿し、採用された。『肉体』の発刊号の言葉に、次のような内容が載っている。

われわれは肉体からはじめる。観念からも、物質からもはじめない。疑わしい一切のものの中で、われわれ自らの肉体的現存だけがこの刹那においてともかくも疑われない存在だからである。(中略)肉体はこれまでの慣習や教理やそのほか一切の権威からのがれる。

歴史の偶然かどうかわからないが、『肉体』という雑誌自体の価値を認めなくても、その発刊のことばには、坂口安吾の「桜の森の満開の下」の真意が含まれていると言えるかも知れない。観念も物質も排除した身体は、すべての慣習や、教理と、ほか一切の権威を蔑視し、これがまた安吾文学の力強さの理由ではなかろうか。よって、安吾文学の価値は、決して「人間存在そのものの本質につきまとう悲哀」を追及するのではなく、逆に人間存在そのものの本質につきまとう悲哀を見抜いた後の悟りにある。安吾自身の言葉で表現す

れば、それはファルスになるのではなかろうか。人間の本質的悲哀を認識してこそ、人類の仮構した価値の幻を知り、真の意味で人間自身の生活に愛着を持ち、「ファルス」の態度で、仮構した価値を嘲笑することができる。安吾は次のように言う。

ファルスとは、否定をも肯定し、肯定を肯定し、さらに又肯定し、結局人間に関する限りの全てを永遠に永劫に永久に肯定肯定して止むまいとするものである。諦めを肯定し、溜息を肯定し、何言ってやんでいを肯定し、と言ったようなもんだよを肯定し——つまり全的に人間存在を肯定しようとする事。  
(傍点筆者)

安吾文学が既存道徳に対して大きな破壊力を持つとともに、人間への愛着を深く持つのは、そのためではなかろうか。「肝臓先生」(『文学界』1950年)の中の肝臓病先生が安吾自身だといえないことはない。坂口安吾は、太宰治とともに「無頼派」作家と呼ばれるが、しかし太宰治の「二日酔い」の影が片鱗もなく、力強さが伝わってくる。太宰治文学を「頼りの無い」文学とするなら、坂口安吾の文学は「頼りのいらぬ」文学で、両者の間に大きな違いがあるのではなかろうか。

- 1 タイトルの英訳はロジャー・バルバースの英語で読む「桜の森の満開の下」を使用した。朝日大学吉村侑久代先生から教示をいただいている。感謝の意を表したい。
- 2 原文の引用はすべて『坂口安吾全集05』(ちくま文庫 1999年)による。
- 3 ロジャー・バルバースの公式サイト：<http://www17.ocn.ne.jp/~h-uesugi/>。ちなみに、同氏



「美しい女」と「満開の桜の森」の真相-「桜の森の満開の下」をめぐって

は、21世紀へ残す本残る本の1番目として宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を上げている。

- 4 『大学でよむ現代の文学』、双文社出版1991年、p221
- 5 坂口安吾の「墮落文学」を論ずる『東方叢刊』1996年第1輯、p170-187。翻訳は筆者。原文は以下のとおり。  
(前略) 阴影原型彻底耗散了、意识自我也随之耗失。一切都是空无的。这是一种不可避免的悲剧、它揭示了人类在阴影原型面前、在无限的动物性强烈欲求面前、没有任何自我解救的办法、完全处于绝对孤独、无法拯救的黑暗之中、人只能顺从阴影原型驱力的指挥。
- 6 原文に忠実という観点から、いまでは慎むべきことばもそのまま引用した。
- 7 『権力への意志——すべての価値の価値転換の試み』(下) 原佑訳 『ニーチェ全集』第12巻(1962年)理想社、p76。
- 8 定本 柳田国男集 第22巻 筑摩書房(1976年)
- 9 篠田正浩『桜の森で何があったのか』(坂口安吾全集05 ちくま文庫1999年)
- 10 『坂口安吾論集Ⅰ 越境する安吾』 坂口安吾研究会編、ゆまに書房発行(2002年)
- 11 安吾は「墮落論」(『新潮』1946年)の中で、「けれども私は偉大な破壊を愛してゐた」といい、「伝統の美だの日本本来の姿などというものよりも、より便利な生活が必要なのである。京都の寺や奈良の仏像が全滅しても困らないが、電車が動かなくては困るのだ。我々に大切なのは

「生活」の必要だけで、古代文化が全滅しても、生活は亡びず、生活自体が亡びない限り、我々の独自性は健康である。」(『日本文化私観』『現代文学』1942年)と公言している。ただ坂口安吾は戦争が好きだということではないことをここで言っておかなくてはならない。逆に、彼は「戦争論」(『人間喜劇』1948年)で、「兵器の魔力が空想の限界を超えてしまったいま、戦争は絶対にやってはならぬ、そしてそのためには世界単一国家の樹立と家族制度の廃棄が必要である」と言っている。

参考文献

- 坂口安吾『新潮日本文学アルバム 坂口安吾』(新潮社 1986年)  
神谷忠孝編『鑑賞日本文学②』坂口安吾』(角川書店 1981年)  
久保田芳太郎 矢島道弘編 『坂口安吾研究Ⅱ』(三弥井選書14 1985年)  
森安理文・高野良知編 『坂口安吾研究』(南窓社 1983年)  
坂口安吾『坂口安吾全集05』(ちくま文庫 1999年)  
早稲田文学編集室編「早稲田文学 坂口安吾特集」(『早稲田文学』2000年5月号)  
『国文学解釈と鑑賞 坂口安吾と日本文化』(至文堂 1999年9月)  
坂口安吾研究会編『坂口安吾論集Ⅰ 越境する安吾』(ゆまに書房 2002年)